『太平記』で知られる大森彦七

千里城城主・大森彦七は、楠木正成を自刃させた人物として『太平記』に登場して、一躍有名になりました。その武勇伝は歌舞伎の演目にもなるなど、さまざまな伝説に彩られた人物です。

砥部出身の画家・矢野翠堂が描いた大森彦七と鬼女の絵馬（重光公民館所蔵）

千里城主の彦七 楠木正成を倒す

『太平記』に登場する大森彦七は、五本松の花畑に屋敷があったといわれる中世の豪族で、千里城の城主として砥部庄を治めた人物です。

南北朝時代、足利尊氏の北朝軍に属し、延元元年（建武3年・1336）の湊川の合戦でめざましい活躍をみせて、南朝の楠木正成を自殺に追いやったとも、その首をはねたとも伝えられます。

のちに南朝正統論の影響で悪人とみなされた彦七ですが、豪勇でならした人物にふさわしいさまざまな物語が砥部の地に残されています。

矢取川での鬼女との闘い 歌舞伎の人気演目に

『太平記』（神田本）は次のように伝えます。

合戦でみごとな闘いぶりをみせた彦七は尊氏から領地をもらい受け、その祝いとして猿楽の席を設けました。家来とともにその舞台に向かう途中で、若く美しい女性と出会い、猿楽に誘います。足元がおぼつかない美女を背負って歩いていると、美女はにわかに恐ろしい鬼となり、彦七を襲ったのです。力自慢の彦七が鬼を組み伏せたところに太刀を抜いた家来が近づき、鬼女は消え去りました。

また、猿楽からの帰り、矢取川で道に迷っていた美女を背負って川を渡ったところ、水面に鬼女の姿が映ったので剣を抜いて逃れたという物語も残っています。

猿楽が開かれたのは松前の金蓮寺であったとされ、そこから「大事金蓮寺」のことわざが生まれました。

この伝説は近世には舞踏劇に、明治になって福地桜痴により歌舞伎に劇化されて大当たりをとり、しばしば上演されました。

宮内に供養塔があるほか、美女が待ち伏せしたとされる重光の魔住が窪には、その霊を鎮めるため地蔵堂が造られ、歌舞伎俳優の松本幸四郎も来松の折に、ここを訪れています。

魔住が窪の地蔵堂はフジの名所　ここで鬼女が彦七を待ち伏せたとされる

Omori Hikoshichi, A Hero From The Past

Omori Hikoshichi, the lord of Seri-jo Castle who governed Tobe-no-sho, appears in “Taiheiki,” a military story during the Namboku-cho Period and famous in historical terms for bringing about the suicide of Kusunoki Masashige. His heroic story provides the foundation for a Kabuki performance.

砥部町名誉町民

Tobe Town Honorable Townspeople

砥部焼の近代化を進め、
地場産業の発展に寄与

梅野（うめの） 鶴市（つるいち）

1890 ～ 1969

明治 23 年（1890）11 月 23 日、大南に生まれる。21 歳の時に陶業窯元である梅野家の女婿となり、陶業経営に従事する。

大正 15 年以降、砥部町（村）議会議員を 5 期、町長を 3 期歴任し、戦中戦後の混乱期や昭和の大合併後の町政運営に優れた政治手腕を発揮した。

一方、産業面において、昭和初年の砥部焼不振の際には、組合による共同設備設置の推進や近代的坏土調整工場、釉薬・石膏工場などの整備、また、原材料・燃料用松割木共同購入などにより砥部焼の近代化と合理化によって打開を図るなど、地場産業の発展と自治行政に生涯を捧げた。大南陶祖ケ丘に銅像がある。昭和 44 年（1969）4 月 8 日没（78 歳）。藍綬褒章、勲五等雙光旭日章 （称号贈呈　昭和 44 年 2 月 14 日）

県議会議長に三度就任、
地方産業の振興に力を注ぐ

相田（そうだ） 梅太良（うめたろう）

1884 ～ 1963

明治 17 年（1884）3 月 10 日、原町に生まれる。東京専門学校に学んだが家業を継ぐため退学し、農業のかたわら酒造業を営む。37 年間にわたり、原町村の村長や県議会議員などの公職、農業会会長などを歴任する。県議会議員在職中にあっては三度議長に就任するなど、人格、識見および手腕ともに優れ、県政界の長老、重鎮として活躍した。

また、産業面においても、昭和 9 年に伊予果物同業組合長に就任し、満州や北支への販路拡大に努めるなど、地方産業の振興に精魂を傾けた。昭和 38 年（1963）1 月 10 日没（78 歳）。原町に頌徳碑がある。（称号贈呈　昭和 44 年 2 月 14 日）

1 万編を超える詩作で人々に
勇気と希望を与え続ける

坂村（さかむら） 真民（しんみん）

1909 ～ 2006

本名・昂（たかし）。明治 42 年（1909）1 月 6 日、熊本県玉名郡府本村（現在の荒尾市）に生まれ、昭和 42 年に砥部町に移り住む。

永年にわたる詩の創作を通して、万物に対する愛情をもって人間の生き方を説き、多くの人々に感銘を与えた。詩の愛好家によって建てられた「念ずれば花ひらく」などの詩碑は日本全国に分布し、外国にあるものも含めると 730 基を超える。

1 万編を超える詩は、あらゆるところで人生訓示として掲示されるなど、さまざまな形で人々に伝えられ、悩み苦しみに直面している人たちに生きる勇気と力を与え続けている。出版された詩集は、小学校の学習資料にも活用されるなど、教育文化の振興にも貢献した。平成 18 年（2006）12 月 11 日没（97 歳）。紺綬褒章（称号贈呈　平成 13 年 4 月 27 日）

現在の砥部焼の基礎を構築、
文化・教育にも多大な貢献

梅野（うめの） 武之助（たけのすけ）

1921 ～ 1999

大正 10 年（1921）12 月 6 日、大南に生まれる。窯元が数軒しかない戦後のどん底の時期に、中央から一流の陶芸家や工芸家を招くなどして、白磁に呉須で代表される現在の砥部焼の基礎を築いた。

また、町民の文化向上のため、砥部町文化協会の設立に努力し、昭和 58 年には同会会長、平成 4 年には同会名誉会長を務めるなど、伝統文化の保存、継承に尽力した。さらに、経済的理由により就学が困難な学生を支援するため、砥部町に多額の資金を提供した。その資金は、砥部町梅野奨学基金として教育の機会均等と有用な人材育成のために運用された。平成 11 年（1999）1 月 28 日没（77 歳）。大南陶祖ケ丘に顕彰碑がある。
紺綬褒章、黄綬褒章、勲五等瑞宝章（称号贈呈　平成 13 年 9 月 21 日）